

司式 杉山昌樹牧師

奏楽 豊島慶子姉

前 奏

開 会 招 詞

* 賛 美 歌 92:1

あたらしきうたもて、主をたたえまつれ。主はくすしきわぎを、成しとげたまえり。
主は救いのわぎを、ちからもてはたし。せかいのくにぐにに、かちをつげたもう。

* 開 会 祈 禱

罪 の 告 白 祈 禱 書 2 罪 の 告 白 ①

神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって、背きの罪をぬぐい去って
ください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。わたしは咎のうちに産み落とされ、
母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。わたしを洗ってください。雪よりも
白くなるように。神よ、わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊をさずけてください。救いの喜び
を再びわたしに味わわせ、自由の霊によって支えてください。主よ、わたしの唇を開いてください。この
口は、あなたの賛美を歌います。 主イエス・キリストの御名によって。アーメン。 (詩編51)

罪の赦しの宣言

十 戒 祈 禱 書 4

- あなたは、わたしのほかに、何者をも神としてはならない。
- あなたは自分のために刻んだ像を造ってはならない。それにひれ伏してはならない。それに仕えてはならない。
- あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱える者を、罰しないではおかない。
- 安息日をおぼえて、これを聖とせよ。
- あなたの父と母を敬え。
- あなたは殺してはならない。
- あなたは姦淫してはならない。
- あなたは盗んではならない。
- あなたは隣人について偽証してはならない。
- あなたは隣人の家をむさぼってはならない。隣人の妻、またすべて隣人のものをむさぼってはならない。 (出エジプト20、申命記5)

* 賛 美 歌 148:2

十字架をしのびーハーーーーレールーヤ 死にて死にかちーハーーーーレールーヤ
生きていのちをハーーーーレールーヤ ひとにぞたまうーハーーーーレールーヤ
アーメン

共同の祈禱 祈禱書 34 復活節第一主日 主の復活

きょうかい いえす きりすと ちち かみ にっぽん きりすと かいかくほきょうかい そうりつ かんしゃ
教会のかしらイエス・キリストの父なる神さま、日本キリスト改革派教会の創立を感謝します。

わたしたちのめしんりへとひらき、そのあか証しによってわたしたちのこころかんか、そのけんしん
わたしたちのいしつよ意志を強め、わたしたちのあゆみちみちびき道を導いたつづつひとびと
創業者たちと、そのあとに続いた人々を覚えます。

わたしたちは、ひたむきにあなたに仕えたつかかれしょうがいよろこ生涯を喜びます。わたしたちも、かれしんこう
うつつかいかいかくこころざしたかもは果たすべきつとまつと務めを全うして彼らとむす
受け継ぎ、改革の志を高く持ち、果たすべき務めを全うして彼らと結ばれますように。

(「創立宣言」)

献 金 (黒) 大会創立 (赤) 大会創立 70

今献ぐるそなえものを 主よ 清めて受けたまえ アーメン

転 入 式

聖 書 朗 読 ヨハネ福音書20章19～31節 (新約聖書210頁)

説 教・祈 禱 「私たちの真ん中に」 杉山昌樹牧師

* 賛 美 歌 154:1.3

1. ちよこえたかく、つげしらせよ。きょうイエスキミは、よみがえれり。

いのちの君は、あまつそのに、われらをめして、いれたまえり。

3. あめよよろこべ、土ようたえ。ものみなとともに、ほめたたえよ。

イエスキミきょうぞ、よみがえられる。ああ限りなき、さかえの日よ。アーメン

聖 餐 式

* 主 の 祈 り 祈 禱 書 1

てん われ ちち
天にまします我らの父よ

ねが み な
願わくは御名をあがめさせたまえ

みくに き みこころ てん ち
御国を来たらせたまえ 御心の天になるごとく 地にもなさせたまえ

われ にちよう かつて きょう あた
我らの日用の糧を 今日も与えたまえ

われ つみ おか もの われ ゆる われ つみ ゆる
我らに罪を犯す者を我らが赦すごとく 我らの罪をも赦したまえ

われ こころ あ あく すく いだ
我らを試みに会わせず 悪より救い出したまえ

くに ちから さか かざ なんじ
国と力と栄えとは 限りなく汝のものなればなり アーメン。

* 頌 栄 66 よをこぞりて

世をこぞりて、ほめたたえよみ さかえつきせぬ、あまつかみを。 アーメン

* 祝 禱

後 奏 (黙禱)

報 告 古澤兵庫長老 (司会・受付 次週：門脇献一長老)

本日 受付 1階:大日南信也・藤井牧子執事 2階:大日南隆夫執事 / ZOOMホスト・録音:
森永翔馬

次週 受付 1階:古澤迪子・星野房子執事 2階:藤井牧子執事 / ZOOMホスト・録音:大
日南信也

※ 2グループ制により、長老も1階と2階に一名ずつ加わります。

ヨハネ20章19-31節「私たちの真ん中に」

目的が大切

今日の聖書では一応29節までで一連の出来事は終わっていて、30、31節はまとめの言葉に見えます。しかし、これはどうでもいいことではなく、イエス様がこのところでおられる目的、あるいは、そもそも福音書全体が書かれた目的、もっと言えば神様がイエス様を地上に遣わされた目的が描かれていると言えます。それは私たちがどう生きるかと直接かかわります。そしてこのところでは、二つのことが挙げられています。一つは私たちはイエス様を、様付で呼びかけますけれども、この信仰そのものについてです。すなわち「イエスを神の子キリストと信じるため」です。それから、もう一つとても大切なこととして「命を受けるため」とあります。もちろんイエス様によって命を受けるのです。ややもしますと私たちはこの神様の命からそれてしまうことがあります。そうではなく、イエス様から命を受け続けてほしい、そのためにこの福音書を書いたのだ、こうしたいのです。

私たちへの言葉として

ところで今日の聖書では二つの日曜日の出来事が語られます。最初は復活の日の夕方、そしてもう一方はその次の日曜日です。丁度私たちも先週そして今日イースターを祝って聖餐をいただきますけれども、それと同じように、二つの日曜のどちらにも中心にイエス様がおられます。弟子たちの真ん中にイエス様が来られます。イエス様が弟子たちと向き合っておられるのです。そして弟子たちを変えてしまわれるのです。そこで決定的なことが起きています。今日はイエス様が何をしてくださっているのか、そして何よりも私たちに何をしてくださるのか、を一緒に聖書から読み取っていききたいのです。

二つの日曜日

それで、この二つの日曜日の目指していることは同じです。それは先ほど確認しました31節にあります通り、だれであれイエス様と出会って「信じてイエスの名により命を受けるため」です。その始まりの様子がこのようにして記されているのです。ただ、この二つの日曜日は、少々性格が違うかもしれません。それは、最初の日曜日において、より教会全体に関わることが語られているのに対して、その次の日曜日の個所においては、特に一人の人、トマスとの関係の中で「信じる」ということについて語られているように見えるからです。けれどもこれは別々のことではありません。むしろ、教会全体がイエス様のものとされるのと、一人の人がイエス様のものとされるのは、連動しているのです。或いは、イエス様は、ただの一人も取りこぼさない、そのような方として、弟子たちと向き合っておられるということが、はっきりと表れているのが、二度目の日曜日においていよいよはっきりとしているのです。イエス様は、十字架にかかれる前、父なる神様に長い祈りをささげられました。その様子が描かれているのが17章です。そこにこのような言葉があります。「聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。」(17:11)。聖名とはイエス・キリストのみ名です。イエス様は救い主である、と言う意味での名です。イエス様に与えられている人は誰であれ、この名によって守られる、これからはずっと守られる、そればかりでなく、神様とイエス様の関係のように、一つの命に生きるようになる、というのです。イエス様が目指しておられるのは地上でこの命を実現することです。

戸の中に

一方で、この19節で明らかのように、弟子たちの現実、恐れと拒絶でした。「弟子たちはユダヤ人を恐れ」とあります。ヨハネ福音書に登場する「ユダヤ人」はイエス様の命を付け狙っていた特定の集団のことです。この時弟子たちは、イエス様を殺した人たちの力が怖かったのです。人を恐れています。私たちもまた、人を恐れることが多くあります。そのような心の奥には、地上における力関係の方ばかりを見ている、という思いがあるかもしれません。この時、恐れに駆られて物理的に戸を閉ざしている弟子たちの姿は、しかし、それだけではなく、神様のお働きに心を閉ざしている弟子たちの心の状態を表しているように見えます。しかし、そのような彼らの真ん中にイエス様はやってこられるのです。ただやってこられるだけではなく、そこで平和を与えてくださるのです。「平和があるように」というのは、むしろ平和が今ここにあるという宣言です。イエス様がおられるところに真の平和が打ち立

てられるのです。そしてその平和は、手とわき腹の傷に象徴されるイエス様の十字架によって勝ち取られた平和です。神様との間に何の差しさわりもない、神様の御力がそのまま人と結び付けられることを根拠とした平和です。

平和を告げる

そしてこの平和は、最初からお話ししておりますように、明確に目的をもって与えられる平和です。それは弟子たちの喜びです。すでにイエス様は、17章の神様への祈りの中で、弟子たちの内に喜びが満ち溢れるように祈っておられました（17：13）。そして弟子たちを派遣することをも祈られていました（17：19、20）。その実現として、イエス様の目の前で喜ぶ弟子たちに向かって、改めて平和を宣言しながら、すぐさま派遣の言葉を続けられています。「あなた方に平和があるように。父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなた方を遣わす」。イエス様は父なる神様によって遣わされている、当たり前のように聞こえます。しかし、これは神様とイエス様との間に強いきずながあることを表しています。イエス様と神様とはつながっているのです。それと同じように、イエス様は、弟子たちを、そして私たちを派遣するのだ、というのです。この世界に向けてです。神様を知らない世界に向けて、神様とイエス様と結び付けられたものとして、ご自身の弟子となったものを、ご自身とのまじわり、つながりの中で遣わすと言われます。ここではそのしるしとして聖霊が与えられています。これは、しばしば創世記の人の創造の記事になぞらえられます。丁度、人が神様の息で生きるものとなったように、イエス様を信じる私たちも、イエス様の霊によって生きるものとなるというようにです。そのようにして遣わされる私たちに神様の命があるのです。ですから23節で語っているいわゆる鍵の権能、罪を赦したり、そのままにしたりという言葉は、ただこの事、すなわち、わたしたちがイエス様とつながっている限りこの神様の命の最先端、切っ先になっているのです。その先に命がつながっていく結びついていくという意味です。

トマスは我々？

しかし、このヨハネによる福音書は、意外なことに、これらの出来事から漏れてしまった人のことをなお語るのです。それがトマスです。彼がどのような人であるのかについて、あまり詳しく書かれたところはあります。ヨハネによる福音書では11章（16節）のラザロのよみがえりの所で、「我々も死ぬ」と掛け声をかけたという記事、あるいは14章で「どこに行かれるのかわかりません」とイエス様の行き先について発言したことが記されていますけれども、彼の人となりについてははっきりしません。ただ、今日のみ言葉の25節では、他の弟子たちが、「イエス様を見た」と証言しているのに対して、一人だけそれを「信じない」と言い張っている様子が描かれています。指を釘跡に、ですとか、手をわき腹に、というような言い方は、強いこだわりを感じます。現代で言えば、神様がいるというのなら、証拠を見せろ、と言ってまくし立てている感じででしょうか。いささか、鼻白むような、がっかりするような態度ですけれども、よく考えてみますと、これこそが、私たち人間の持っている素のままの心なのかもしれないのです。イエス様が復活された、というけれども、そのようなことが本当にあったのだろうか、神様によって新しい命をいただくとはどのようなことなのか、どうもよくわからない、という思い、どこかしら消化不良というのでしょうか。イエス様を信じますと言いながらも、竹を割ったようにスパッと割り切れないような思いがどこかしらあるかもしれないのです。

向き合うイエス

しかし、まさにそのような人のためにこそ、イエス様は、やってこられるとヨハネは言いたいのです。この二度目の日曜日、相変わらず弟子たちは、恐れに囚われ戸を閉ざしていたようです。その所にイエス様が来られて、そこで平和を打ち立ててくださるのです。そして、まさにトマスに向かって、彼が言った無茶な要求、すなわち、「指を釘跡に、手をわき腹に」という言葉をオウム返しのようにして、そのまま実行するように迫るのです。あなたが疑うのはもっともだ、あなたが信じられないというのなら、あなたがしたいということを全部私に対してしてみてもどうか、気が済むまで、思う存分やってみたらいいだろう、そのようにして、ただ一人の人と真正面から向き合ってくださいているのです。それ

は、どれほどかたくなな一人の人も決して失われたいためです。このようにして、イエス様は、信じることのできない人がつぶり四つに向き合って下さるのです。とことん向き合ってくださいなのです。そうして、「信じない者ではなく、信じる者になりなさい」と信仰へと招きだしてくださいなのです。わたしたちが信仰を得る、というのは、このようなことです。イエス様に向き合っていて、イエス様に語り掛けていただいたその時に、私たちの中で変化が生まれるのです。

信仰は与えられる

トマスは答えました。「私の主、私の神よ」。まさに、トマスはイエス様によって、信じない者から、信じるものに変えられたのです。イエス様を、「私の主、私の神」と告白するものに変えられたのです。そして同時に、この事こそ、わたしたちがイエスの名によって命を受けるという出来事そのものです。そしてこれこそ、あの17章のイエス様の祈り、「聖なる父よ、わたしに与えてくださった御名によって彼らを守ってください。わたしたちのように、彼らも一つとなるためです。」という祈りの実現です。このようにして、イエス様は、いつでも、信じない者を、信じる者へと、取り残された一人の人を、ご自身の民へと作り替えてくださるのです。私たちもまた、このようなイエス様と出会って作り変えていただいたのです。しかし、それは一度で終わるものではないのです。

見ないのに信じていく

この所の最後の言葉は、少々謎めいているかもしれません。「私を見たから信じたのか、見ないのに信じる人は幸いである」。これは、トマスに小言を言っておられるのでしょうか。しかし、そもそも、弟子たちの証言は「私たちは主を見た」（25節）でした。あるいはマグダラのマリアが弟子たちに告げた言葉も「わたしは主を見ました」でした（18節）。主を見たことが一段劣ること、そこで受ける幸いさも少々小さい、というようなことをイエス様は本当に言われたかったのか、と考えますといささか疑問です。もちろん、この所の解釈は注解書といった書物にもいろいろに書かれています。けれども、私はこう思いました。これからあなた方は、私を直接見なくても、信じるようになる、何度でも、何度でも、わたしを信じる者にされていく、そして、そのこと自体が幸いなのだ、という意味です。

私たちの真ん中に

事実、私たちは、今このようにして、イエス様を直接見なくとも信じる者とされています。今日、この後で聖餐をいただきます。聖餐こそは、イエス様が差し出してください、イエス様のみ体とパンを霊の導きにおいて受け取る時です。イエス様と私たちが一つであることを味わう時です。そしてそこにこそ、幸いがあります。この聖餐桌を囲む私たちに、この会堂に、イエス様が霊において臨在して下さるからです。私たちは、このイエス様を主、神と告白するものとして、幸いな食事を共にします。

祈り

主イエス・キリストの父なる神様。私たちがなお困難な中であって、日々あなたに支えられていることを覚えます。そればかりでなく、あなたは御霊において今も私たちに顧み、御子と引き合わせてくださいます。私たちがトマスの叫びに声を合わせ、イエスを我らの主、我らの神とたたえて、この週を過ごし、また、それぞれの所であなたのご栄光をあらわすものとされますように。主イエス・キリストのみ名によって祈ります。アーメン